

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

まえがき

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2021-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武石, みどり, Takeishi, Midori メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1355

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



まえがき

武石 みどり (音楽学)

本冊子は、2019 年度本学博士課程の選択科目「博士共同研究 B」において論じた問題について、参加者の報告と所見をまとめたものである。

博士共同研究 B では、「演奏解釈論の総合的研究」としてこれまで演奏に関わるさまざまな問題を取り上げてきた。今年度は参加者の関心が一致するテーマとして「20 世紀前半における音楽と民族性」を掲げ、各々の専門分野からその事例を論じた。音楽大学で演奏される多くの作品が「芸術音楽」のカテゴリーに入ると考えられるが、その一方で「民族性」の要素を作曲家の思考や作品の中にどのように見出し、位置付けることができるだろうか。また民族性を感じる作品とその時代背景にはどのようなつながりがあるのだろうか——このような問題意識を出発点として、作曲家／演奏家が意識する民族性やアイデンティティ、ナショナリズム、そしてそれらに伴う具体的な作曲や演奏上の技法について、参加者それぞれが多様な角度からのアプローチを試みた。授業は、参加者による報告と質疑応答、および全体ディスカッションにより進められた。各回の内容は次ページに示したとおりである。

春学期には、学生と教員がそれぞれの専門分野における「民族性」の問題例を報告して討論した。そこから、民族性は音楽的素材のみならず、作曲家の自国や出身地域への意識、あるいは異国への関心、戦争や開国といった政治的状況と深い関わりがあることが見えてきた。そして各国が自国文化への意識を明確にし始めた 20 世紀前半こそ、民族性の模索と多様な表れ方が見え始めた時期であることも判明した。秋学期にはそこから問題を「民謡との関係」に絞り、学生がそれぞれ自分の考察課題を絞り込んだ。また 6 月には博士共同研究 A との合同により、ブリュッセル王立音楽院教授サルバトーレ・ジョヴェーニ氏による特別講演『オルガン概説』を聴き、第一線の研究者の方法論やプレゼンテーション・テクニク、質疑応答を間近に体験する刺激的な機会となった。

日付	内容	報告者
4月11日	ガイダンス 博士共同研究Aと合同 今年度の指針を確認	
4月25日	今年度のテーマについてのディスカッション	
5月9日	各自の取り組み可能課題の報告	虫明 鈴木 久津見 陳
5月23日	「マヌエル・デ・ファリャとカンテ・ホンドについて」 「19～20世紀にかけてのドイツにおける楽譜叢書刊行と民族意識について」	虫明 村田教授
6月6日	「エネスクのルーマニアの民族音楽について」 「民族叙事詩『カレワラ』から考える、シベリウスの交響詩について」 「コダーイ作品に表れた特徴と演奏法について」 「イタリアの歴史とオペラハウスの変化」 「山田耕筰：歴史的背景と作曲家の意識の変化」	陳 鈴木 フェイギン教授 星准教授 武石教授
6月20日	「オルガン概説」	ジョヴェーニ 教授
7月4日	「ジャズオペラに見られる民族性」 「日本人女性初の作曲家、金井喜久子について 一琉球の民謡一」 「民俗芸能・民俗音楽の100年 一明治・大正・昭和・平成一」 「ピストン式とロータリー式：トランペットの比較」 「鍵盤上での『国』 一国によって違う奏法と音色について一」	久津見 荒尾准教授 福田准教授 津堅教授 岡田教授
7月18日	「カンテ・ホンドについての講演ではどのようなことを主張しているか」 「民族叙事詩『カレワラ』とシベリウスの作風の変化 一交響詩を中心に」 「エネスクとルーマニア民族音楽」 「ジャズオペラから見る民族性」	虫明 鈴木 陳 久津見
9月19日	「カンテ・ホンドコンクールに見る一地方の民族性の主張」 「20世紀におけるイングランド民謡《グリーンズリーブス》の利用」 「ルーマニアの民族音楽」 「民族叙事詩『カレワラ』とシベリウスの交響詩における作風の変化」	虫明 久津見 陳 鈴木
10月3日	秋学期のテーマについてディスカッション レクチャー・コンサート開催に向けての話し合い	
10月17日	「ドホナーニのハンガリー民謡作品について」 「ハンガリー民謡か？ ルーマニア民謡か？」 「ヴォーン＝ウィリアムズの歌曲」 「デオダ・ド・セヴラックの作品について」	鈴木 陳 久津見 虫明
10月31日	「ドホナーニの《ハンガリー牧歌》Op.32aと《パストラレ》の元となった民謡の調査」 「コンサート展開案：セヴラックとラヴェルから見る民謡を『扱う』スタンスの違い」 「ヴォーン＝ウィリアムズの考える民謡、作曲への意識」	鈴木 虫明 久津見
11月4日	「バルトークの民族舞曲とサラサーテのツィゴイネルワイゼンについて」 「ドホナーニのハンガリー牧歌について、ハンガリー民謡大観からの調査」 「ヴォーン＝ウィリアムズの作品の民謡的要素」 「ラヴェルとセヴラックの比較」	陳 鈴木 久津見 虫明
11月28日	「ヴォーン＝ウィリアムズの題材意識の変化」	久津見
12月12日	レクチャー・コンサートに向けての発表準備 「サラサーテのツィゴイネルワイゼン」 「ドホナーニのパストラレ」 「ラヴェルとセヴラック」 「ヴォーン＝ウィリアムズと民謡の精神」	陳 鈴木 虫明 久津見
1月16日	レクチャー・コンサート《民謡に触発された作曲家たち》 「ツィゴイネルワイゼン ～勘違いから生まれた名曲～」 「エルネー・ドホナーニの民謡に対する姿勢と表現」 「ラヴェルとセヴラックから見る民謡との向き合い方、その姿勢」 「ヴォーン＝ウィリアムズ ～民謡の精神に基づく作品～」	陳 鈴木 虫明 久津見

合計 15 回の授業を通して、指導に重点を置いたのは以下の 2 点である。

- ①口頭発表において自分の論点を絞り、レジュメ（紙媒体）や音源（聴覚）、画面（視覚）を通してその内容をわかりやすく伝えること
- ③討論で得られた批判や意見を十分に理解した上で、自分の考えをまとめ直し、論拠と結論とが明確な発表になるように推敲を重ねること

このような方針の下に、各学生は自分の事例研究の課題を絞って 2020 年 1 月 16 日開催（A200 教室）の公開レクチャーコンサート《民謡に触発された作曲家たち》でその内容を演奏とともに発表し、さらに後掲の研究報告を作成した。報告の作成にあたっては、各学生の論文指導教員のご協力を得たことについても付記し、感謝の意を表したい。

博士共同研究 B 参加者

教員（専攻）	学生（専攻）
岡田敦子（ピアノ）	鈴木啓資（ピアノ）
フェイギン・ドミトリー（チェロ）	虫明知彦（ピアノ）
津堅直弘（トランペット）	陳金（ヴァイオリン）
星洋二（声楽）	久津見れい（声楽）
荒尾岳兎（ソルフェージュ）	
福田裕美（音楽教育）	
武石みどり（音楽学）	
村田千尋（音楽学）	